

二〇二二年度

適性検査型 入学試験問題

適性検査型 I (五十分) (全五ページ)

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 解答用紙は二枚です。試験開始の指示と同時に、二枚の解答用紙に受験番号と氏名をそれぞれ書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていないか、印刷がはつきりしないところがあったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点・記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



東京純心女子中学校

問題は次のページからです。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(*印のついている言葉には本文のあとに「注」があります。)

文化という現象が人間にとって非常に重要なのは、それが価値の問題でもあるからです。価値というものは、あるいは人間にとっての象徴的なものを意味として与えるのが文化の大きな特質である、と言ってもいいでしょう。ですから私たちは生まれ育った文化の枠によって束縛される度合がかなり強いということができません。どんなに国際化されても、あるいは自分の文化を振り切ったと思つたとしても、どこかに自分が生まれ育った文化をになつていて、あるいはその宿命から逃れられないという側面を人間は残しています。

たとえば、ドイツで育つたユダヤ系のハンナ・アーレントという有名な政治哲学者がいます。彼女はナチスに迫害され、アメリカに行つて、アメリカの大学で英語で講義し、本を書くようになりました。しかし彼女が第二次世界大戦後ドイツに初めて旅をしてインタビューに応じ、その中でドイツに惹かれると語つて居るのです。自分が育つた母語としてのドイツ語に惹かれるという理由でした。(中略)

日本人の場合は、戦争に際しても外国に亡命したり、国籍を変えるケースは非常に少ないといつてよいでしょう。逆に長年外国で成功した社会生活をおくつていても最後は日本に帰ってくるという例はたくさんあります。その場合も帰国する動機に育つた日本文化が強く影響していることが多いと思います。

一方で、とりわけ現代は、これまでも触れましたように誰しも異文化と出会うという経験を持たざるをえない時代と言えましょう。どんな地球の片隅に

住む人間でも、どこかで自分と違った文化と接していると言われていますが、それは、まったく孤立した文化といふか孤立した人間集団は九九パーセント存在しない、ということなのです。特に近代以降の交通手段の発達した時代になると、なんらかの形で異文化と接触することが、繰り返しますが人間が生きるうえで一種の宿命になってきています。

社会の中で個人は孤立しては生きられないわけで、他人と出会い、集団と一緒に生活するというのが社会的動物といわれている私たち人間の宿命です。と同時に、文化も一つの文化だけで孤立しては成立しません。自文化だけでは存在しえないのです。他の異文化と絶えず接触しながら、その影響をうけたり、また影響を与えたりしながら存続していくのが文化であると思つていいと思います。日本の文化もまさに太古以来いろいろな異文化の影響をうけて存在してきました。(中略) 現在のような日本文化も、濃厚に外来の異文化の影響を受けて成立してきたものなのです。

このように、(中略) 二つの宿命を併せ考えると、私たちは自文化と異文化の狭間はざまの中で生きていかざるを得ないし、現在は特にそういう時代だと言つていけるかと思つています。それが逆に自文化の枠と異文化との違いを感じさせもするわけです。文化をめぐる状況はとても複雑です。

異文化と出会うことは現代人にとって避けられない宿命と申し上げました。その場合の異文化は、たとえば外国からきた一枚の絵葉書でもいいのです。たとえば、インドからきた絵葉書に祭の風景が描かれていて、これはなんだろう、自分たちの祭と違うものだと感じたと言つていいです。これはもう異文化と接触したこ

とになるでしょう。また、人によっては両親が仕事などで外国に行き、その外国で生まれ育って、日本へ帰ってきて初めて日本文化を異文化として発見する人もいます。それから小説とか、映画とか、音楽とか、またテレビやインターネットなど、いろいろな形で異文化と出会う機会がいまでは豊富に与えられています。大切なのは、異文化を異文化として意識するということではないかと思うのです。(中略)

先にも記しましたが、さらに現在の日本の都会では、向こうから日本人とまったく同じような身体と服装をした人が来て出会ったときに、日本語で話しかけたら中国語が返ってくるとか英語が返ってくるとかいった経験をすることがあります。外国に行ったとき、自分たちで自明だと思っていたことがまったく自明でないという経験をし、そこで異文化がある、違った世界があることを認識するのは普通の体験でしょうが、国内で外国人と出会ったときにも同じような経験をすることがあります。また誰しも映画やテレビや本を通してでも、自分たちとは違ふな、これはなんだろうと思うような異文化との出会いの瞬間があるはずです。

外国語を初めて習い始めたときにも異文化体験ができるのですが、ただ、これまでの日本の学校ではこれを異文化理解の形で教えようとはなかなかしませんでした。英語教育も、最近ようやく、本当は文化としての英語として教えるなければいけないと言われだしましたが、これまではほとんどそうではありませんでした。少なくとも私などが受けてきた経験では言葉は文化と切り離されてきました。しかし、言葉は人と文化とともに存在するものですから、言葉だ

け独立して教わるというのは難しいと思います。そういう点では日本は外国語教育の面でもあまりにも自文化の中に充足しすぎているのではないのでしょうか。私は、日本は外来文化を非常に広く受け入れる、世界でも珍しい社会であると思っています。ですから、日本にすれば世界中の料理があるとか、世界中の文化のいろいろな面が見られることもあるし、欧・米を中心として外国語の書物の翻訳も書店にあふれているわけですが、同時に、日本の文化の特性として、外来文化を自分たちが必要だと思うところは全部取り入れてしまおうが、そうすると本来の文化が持っていた形を全部なし崩しにして自文化に同化させてしまう、あるいは消化してしまうところがあるとも思っています。たとえば、平仮名とか片仮名という日本の文字はもともとは中国の漢字からつくり出されたものといわれていますが、いまではこれにさらにローマ字も加えて使っているわけです。それらを日本語の中に吸収してしまい、漢字も本来の中国語とは違う意味や音で用い、ローマ字も日本語的に使っています。

日本文化には、非常に開かれた受容性と同化、あるいは、消化による閉鎖性へいせいせいが同居している側面があります。そしてそれが、これだけ外来文化を多く取り入れているのに、依然として異文化に対して非常にナイーブだといわれ、国際化で苦しんでいる大きな理由ではないかと思っています。

ですから、(中略)私が最後に申し上げたいことは、異文化理解を改めて問題として取り上げ、そのさまざまなあり方を見て、積極的に異文化を意識し発見して理解しようということです。最初に述べましたように、異文化に対する対処の仕方が重要かつ不可欠な時代となりました。「異文化理解」をさまざまな

面で検討することは、この地球上において人間^{たが}そして人類が、互いに平和に協調して発展してゆくための基礎的な行ないとなるのではないのでしょうか。よく一般に「文化は軽い」と言われていますが、現在では実に「文化は重い」ものなのです。

〔異文化理解〕青木保 岩波新書 2001年刊

〔注〕 束縛 —— 制限を加えて自由にさせないこと。

宿命 —— 生まれる前の世から定まっている運命。

亡命 —— 政治上の原因で本国を脱出して他国に身をよせること。

充足 —— 満ち足りること。

ナイーブ —— 経験が^{とほ}乏しく、未熟なさま。

【問題1】

二つの宿名とは、どのようなことですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。なお、ゝや。や「なども、それぞれ字数に数え、一まずめから書き始めること。

「きまり」○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○ ゝや。や「なども、それぞれ字数に数えます。これらの

【問題2】

異文化を異文化として意識するとありますが、これはどのようにすることですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。なお、ゝや。や「なども、それぞれ字数に数え、一まずめから書き始めること。

記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じ
まずめに書きます。(まずめの下に書いてもかまいません。)

○ 。と「が続く場合には、同じまずめに書いてもかまいません。この場合、「で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのまずめは、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのまずめは、字数として数えません。

【問題3】

積極的に異文化を意識し発見して理解しようとはありますが、あなたがこれまでに直接的または間接的に出会った異文化と、その出会いから学んだことや、そこから受けた影響について記述しなさい。ただし、次の「手順」と「きまり」にしたがって、三百字以上四百字以内で書きなさい。

「手順」 1 いままでに出会った異文化の具体例を書く。

2 その出会いから学んだことや、そこから受けた影響について自分の考えを書く。